

新選組旅行記 “楠田 行展”

皆さん遅ればせながら、新年明けましておめでとございます。旧年中はコレクティブへのご愛顧賜り、誠にありがとうございました。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

さて、新選組の足跡を辿るこの旅行記も今回で5回目を迎えますが、ボクの中で新選組が自分のキーワードとなって2年と半年。様々な場所に訪れ、様々なことを感じてきましたが、自分の思いに誠実であること、自分の信念を強く持つことがいかに大切であるかを常々考えさせられます。

今回はボクの住む現在の奈良県出身の隊士、尾関雅次郎を紹介いたします。彼は天保15(1844)年、大和国高取藩植村家臣、尾関文左衛門の家に生まれ、兄、弥四郎と時をほぼ同じくして文久3(1863)年6月新選組に入隊しました。そして、入隊1年後の元治元(1864)年12月に旗役(旗手)に任ぜられます。そう、皆さんおなじみの「誠」の旗です。

ここで、少し旗というものの役割を挙げておくと、旗を掲げる集団が何者なのか、その身元を明らかにする機能。他の集団と識別するための目印。そして、集団のアイデンティティを示す象徴。これらが挙げられます。この旗役は、はっきり言って重たい役目だったであろうと安易に想像が付きません。だって「誠」ですから。初めて京の街で高々とこの隊旗を掲げた時、彼はどのような気持ちだったのでしょうか。明らかに目立ったであろうこの旗を掲げるといことは、先ず誠実でなければならず、忠誠心を持たなくてはならないという容易ならざる覚悟ありきなのです。ボクが持っている学研の「漢字源」という辞書の誠の項にはこうあります。一まこと。うそのない心。また、ごまかしのない言行。訓は「真事(まこと)」の意。と。この一字はまさに近藤ら新選組の態度そのものなのです。これで旗役に任ぜられた尾関の新選組での立ち位置は決まったようなものです。だって組のアイデンティティを背負っているのですから。つまりは生涯新選組。時代が葵の御紋から菊の御紋に移り変わり、組でも脱走、分離が相次ぐ中でも尾関は常に近藤、土方とともにありました。戊辰戦争でも、鳥羽伏見を経て、甲府、流山、宇都宮、会津と転戦、そして最後の箱館まで戦い抜いたという史実が彼の心を語っています。有言実行した彼の誠には感服の言葉以外見つけられません。流山で捕縛され処刑された近藤勇。箱館で狙撃され戦死した土方歳三。この二人の死の前でも尾関は戦い、その時にも旗はともにあり局長、副長の意思を示すべく存在したのでしょうか。

終戦後の明治2(1869)年11月、高取藩に預けられた尾関はその後タミという女性と結婚。明治25(1892)年2月28日に49歳で没しました。現在彼は奈良県高市郡高取町越智(おち)にある、越智山光雲寺という黄檗宗の寺の墓所で植村家臣団の一番上で弥四郎と同じお墓の中で眠っています。「尾関氏の藩中でのポジションはかなり上だったようです。赤鬼、青鬼と藩中で言わしめた尾関兄弟はかなり迫力のある人物だったそうです」(光雲寺関俊道氏談)

池田屋事件(元治元年5月3日)以前に入隊し、明治2年5月15日の箱館降伏まで生き残ったのは島田魁という隊士とこの尾関雅次郎のたった2人。厳しい組、厳しい時代の中に生きた赤鬼はまさに精神力、生命力ともに「誠」の人物でした。 誠

kengoのマカロン嘸 “kengo matsui”

vol.002 pâtissier Eiji Nitta

マカロンのおいしい嘸をお伝えするこのコラムですが、哀しいかな、この関西地方でこれぞというマカロンに出会うことは困難です。マカロンはメレンゲ菓子で、中のクリームはもちろんのこと、外はほんのり軽やかで中はしっとり、という焼き加減が繊細で、多くの場合は外側が焼き過ぎなのか固めで、ぼろぼろと崩れてしまい、食べにくい上に口当たりも悪く、高いばかりでおいしくないお菓子という印象になりがちです。さすがに東京には世界的な有名パティシエの店が多数あり、クオリティの高いマカロンが手に入りやすいのですが、関西ではそういったパティシエが店出しないというのが現状・・・

そんな中、今回紹介するパティシエ、新田英資氏の作り出すマカロンは、関西随一。焼き加減、クリームともに素晴らしく、世界的なパティシエの店にも劣らぬマカロンです。新田氏のプロフィールを彩る多数の受賞歴の中でも、殊の外目を引くのは、「TVチャンピオン『ケーキ職人選手権』優勝」でしょう。こういったある種世俗的な賞を取るからと言って侮ってはいけません。この店は、マカロンだけでなくガトーの味も注目に値します。

阪急神戸線西宮北口駅前の閑静な住宅街に佇む、気品溢れるこのパティスリーには、遥々大阪からでも足を伸ばす価値があります。おいしいマカロンを食べてみたい方は必ず訪れるべき、と断言します。僕のお気に入りにはパッションシヨコラあたりでしょうか。また、驚嘆すべきは味だけでなくマカロンの価格もです。180円から220円程度が相場のマカロンが、この店では120円なのです。飾らぬ街のパティスリーでありながら気品を保つこの店の志高き逸品を、一日も早く皆さんが味わうことを願って止みません。

パティシエ エイジ・ニッタ
〒663-8032 兵庫県西宮市高木西町23-5
TEL&FAX 0798-64-0808
営業時間 10:00~19:00
定休日 火曜日(祝日の場合は翌日)

information

次回collectiveは2008年春を予定しています。

HPではpodcastによるDJ MIXもDLできます。

Check Our Programs!

http://www.geocities.jp/collective_web/

press collective

「稲垣氏、MK砲を熱く語る」 “yu”

最近思うこと？なんか他の趣味？浮かばないので、とりあえず好きなコンポーザーの話でもしときましょか。MKって奴がいるんですよ。Mark Kinchen。松井健吾のイニシャルもMKですか。それは全然関係ない話なんで悪しからず(笑)。MKっていうのは結構古いデトロイトのおっさんなんです。あれこれと調べんのが嫌いな僕なんで、MKの魅力を見極めと偏見で書き散らすことにします。とりあえずね、すごいよ、クセが。MKの曲で最初に聞いた曲といえど、石野卓球テクノ大使が監修したMIX CDシリーズもんで、ケン・イシイという日本人にやらせてvol.3に収録されたdecayという曲があるんです。decayに関しては圧力に尽きます。もう、シンセの音の持ちうる音の力強さと疾走感をもって聴く者に迫ってくる圧力ですね。メロディーにしてはワルというよりは不気味な感じですが、この不気味さがなにより魅力だと思います。あとは、商業的にも成功したデトロイトテクノの代表的なユニットである(とあえて安っぽく言っておきましょう) INNER CITYのSET YOUR BODY FREEという曲のMKによるremixとか僕大好きなんですけど、わかりし当時の売れ線テクノのレイビーな部分を彼独特の非キャッチーなフィルターを通して形でアレンジして音作りされているところが魅力といえます。MKの曲をだらだらと何曲も紹介していくとどうなのって感じになるので、ある程度で切りたいんですが、彼はデトロイトの人間としては珍しく、デトロイトテクノだけでなく、NYハウスの連中とも交流が深いというのが特徴です。まあ、音作りとしてどっちやねんってのが所以なんですけどね。90年代半ばぐらいまではかなりの売れっ子リミキサーとして評価されていたと思います。セリーヌディオンや、ナイトクロウラーズのリミックス、プロデュースなど大型の仕事もあったようですね。特にナイトクロウラーズのpush the feeling onのリミックスは事実大ヒットし、言わずと知れたヒット曲のコンピレーションであるNOWの1995年盤に収録されてしまうほどでした。彼自身もユニットを組み、MK feat. Alanaとして、burningや、alwaysなどのスマッシュヒットを飛ばしています。とにかく、クセといえば普通のハウスだと思って油断するとかならず変な独特のフレーズが入ってきたり、歌の一部分を執拗なまでにループさせたりするところ。MK feat. Alanaの曲の中でも特に気に入っているのがLove Changesという曲なのですが、こちらは切ないシンセのメロに泣かせコードのピアノが「ジャン、ジャン♪」って感じで入ってくるのですが、これがまた粗い。指一本ずつ使ってコードのメロ作ったんじゃないかといいたくなるような「生演奏感の全くない」ピアノですね。でも、この荒さがかえってAlanaの歌い上げる声に切羽詰る感を与えてとても曲としては引き締まる方に作用していると思います。まあ、とはいえ、基本的にエレクトリックなつくりの曲が多いので、僕がここでどれだけ彼の曲の魅力を推そうとしても、最近では彼の手がけた楽曲は多くのサラッとしたハウスのDJや、ブラックソウル原理主義のハウスDJには敬遠されるというか、上から目線というか、そもそもスルーされている状態にあるのが現在の空気ってものなんです。こんな個性はMKにしかでないもんだと思いますし、歌の一部分がループしつづける気持ちよさはそこの奴らには出せんと思います。NYの売れっ子連中と絡んでも、UKのアーティストをプロデュースしつつも違和感あるトラックを作り続けた彼にはデトロイトに腰を据えて活動している連中に負けない芯の強さがあると思いますし、エレクトリックで人肌の温かみから縁遠いトラックに暑苦しいボーカルが乗っているというそこにはきつと彼にとつての黒さがあるんだと個人的には思っております。まあ、細かいことを抜きにして、単純に僕にとって踊りたくなる曲だし、DJするときにかけて楽しいので、僕はこれからも大事に彼のレコードを扱い、そして、かけ続けていこうと思っています。

レコ屋よ、俺が買うから倉庫から出せ！その代わり値付けは安く！

レコ屋さんと僕とcollective “tawaki”

僕が初めてレコードを買うようになったのが中3の終わり頃。当時はTalking LoudなんかのアシッドジャズやNATIVE TONGUE周辺のヒップホップが好きで、バルコに入っていたJELLY BEAN RECORDSやビッグステップの地下に入っていたKING KONGなんかに通ったものでした。当然、ガキんちよなわけで、良い音源との出会いの多くはスタッフとのコミュニケーションから生まれたものでした。現在、NEWTONE RECORDSの店長を務める斉藤さんがJELLY BEAN RECORDSのスタッフをしている頃、スノッパな小僧を相手に親切にもらったものです。

ここ2,3年、レコ屋の開店ラッシュが後を絶ちません。アメ村の奇人と畏怖されたカリスマ店長率いる「人類レコード」、リーズナブルな価格設定が嬉しい「FOREVER RECORDS」、そしてクラブミュージックの総本山として多くのDJたちを育てた「CISCO RECORDS」。アナログ専門店じゃないけど、タワレコ心齋橋店の閉鎖もレコ屋不況を象徴した出来事でした。タワレコも店舗ごとに色があって面白いのですが、心齋橋のタワレコは先進的な音楽や実験的な音楽がやたらめったら充実していて、キッズ時代には相当学習させてもらいました。たまのデートにもタワレコに行く始末でよくガールフレンドを不機嫌にさせたのも今となっては思い出となってしまいました。

レコ屋不況の元凶は、そもそもレコを買う奴が減ったということ、買う奴は買う奴で、ウェブ上で注文するというスタイルがかなり一般化したということにあると思われ。一時「eコマース」という言葉がCMで飛び交っていましたが、インターネットの進化は、新しい経済の仕組みを生み出すことぐらい、僕にだってわかりました。が、しかしですよ。何か釈然としなない…。そこで欠けていると痛感させられるのが「出会い」なんですよね。

レコを買う年月も長くなると、当然、自分が求めている音がどのようなものなのか要領を掴むことができているのですが、そうなる、たいがい買うレコードが二番煎じのようなものになってしまい、マンネリ化を招くものです。こんな経験みなさんにもあるんじゃないでしょうか？

「ぶらりレコ屋に顔を出す。」

実はこのような行為は新鮮な音に出会うチャンスなんです。もともと自分が気になっているアーティストの音源をネットなんかで検索するのも良いですが、僕なんかは、むしろ店にかかっている音に反応して「コレ何かね？」と尋ねて知るパターン。そんなことから店の人と親しくなるなんてこともよくあるパターンですよ。こういう関係が高じてこそディスカウントしてもらってもシバシバです。最近レコ屋でmtuneという80'sのファンクバンドの存在を知ったのですが、以来、僕のハートはもう80'sファンクにやられてっ放し…。偶然の出会いだからこそ、喜びもデカいってものです。

collectiveもレコ屋と同じで、ブラリ立ち寄って、いい音に出会ってほしい。そして人と人との素敵な出会いがあれば、もうカンパキですよ。2008年、皆さんに良き出会いがあらんことを！

極私的ハウス噺 “itaru wakui”

「Lil Louisの巻」

気がつけば年も明け2008年。温暖化が叫ばれる昨今とはいえやはり冬は冬。寒さキビシク雪の舞うような日もありますが、まもなくキャンピングを迎えるプロ野球選手にははっきり自主トレを過ごして欲しいものです。そんなことはともかく、みなさまこの冬も素敵な音楽ライフを過ごしていられませんか？

さて毎度いろんなハウス人にスポット当てつつ駄文をつづるこの連載、今回はシカゴが生んだ変態Lil Louisさんにズームインしてみようと思います。このLil Louisさんは「French Kiss」(1989)という曲でデビューしたのですが、曲の途中からだんだんピッチダウンしていくと同時に女性の喘ぎ声がフェードインしたかと思うとまたふたたびミニマルなトラックが淡々と展開されるという特徴ある展開でこの曲は大ヒットを飛ばし、シングルはなんと500万枚もの売上を記録したそうです。それにしてはまったく信じがたい数字です。

「French Kiss」1曲ですっかり変態のレッテルを貼られたLil Louisさんですが、他方ではjazz心溢れる渋い曲も多々リリースしているのです。たとえば「club lonely」という曲——「ねえ、今夜のパートナーのゲストリストに名前があると思うんだけど…」とドアマンに話しかける女性に対し、「はあ～！？今日はゲストリストなんてねえよ！」とぶっきらぼうな返事が…。そしてショックを受ける女性の泣きがあり、そこから曲が始まるというなんとも奇妙なイントロの1曲なのですが、曲調はムードあるヴォーカルにピアノやストリングスが重なるjazzyな流れで全体として「夜」といったかんじの雰囲気です。

1990年代初頭にはしばらくブランクがあったLil Louisさんですが1996年リリースのBlack Magick名義での「freedom」の大ヒットでふたたびトッププレイヤーとしての地歩を固めます。生演奏をふんだんに導入した曲づくりは当時の流行でありながら、ゴージャスな音は当時絶頂のstrictoryレーベルゆえか、あるいはサポート参加のLoie Vegaの功勞なのか、はたまたLil Louisさんの欲が全開したせいなのか、とにかくにも見事に三つ巴でがっぷりと組み合った結果として生み出された片丸ごと10分超という大作でして、飽きさせない壮大さドラマチックさはダンスミュージックという枠を超えています。ミニマルさからは対極にあるような展開の曲なので、ただただ反復されようような音楽はちょっと…。とお思いの人なんかにはぜひ聴いてみてほしいと思う1曲です。そのうちがっつり始めから終わりまでかけてみるかも知れませんが、楽しみにしていただければ幸いです。

てなこと、みなさんも素敵な音楽を楽しんでください。ね。